スポニチ 号外

結実SHOWバスケット

祝!! 創部57年目初 日本一!! 専大

全日本学生選手権大快挙

専大のショーバスケットが天下を獲った。バスケットボールの全日本学生選手権（男子第54回、女子第49回）は02年11月23日から12月1日まで東京・国立代々木競技場第2体育館などで行われた。突出した個人技を誇る専大は、決勝リーグ2戦目の日体大戦から本来の実力を発揮。最終の早大戦は110―54とダブルスコアで完勝し、創部以来57年目で見事大学日本一に輝いた。最優秀選手（MVP）はポイントガードの青木康平（4年）、優秀選手に波多野和也（2年）中川和之（2年）が選ばれた。

仙人だ神様だ青木だMVPだ

やった、ついにやった日本一!!トロフィー、カップを手に喜びを爆発させる専修大バスケットボール部栄光のメンバー（上）MVPを獲得した青木のシュート

早大にダブルスコア勝ち!! ド派手に飾った

序盤の苦闘巻き返し

待ちに待った栄光の瞬間、スタンドからコートを見つめていた選手たちは、のどまで出かかっていた喜びを一気に爆発させた。笑顔がはじけた。誰彼なく抱き合った。表彰式。大学日本一を勝ち取った殊勲者たちは、新関光一監督（48）を胴上げした。指揮を執って17年目のいかつい体は、高く高く、聖地・代々木第2体育館に舞った。

険しい道のりだった。初戦の東海大戦はアウトサイドの守備が甘くなって3点シュートを食らい、前半はリズムに乗れなかった。後半は底力を見せて9点差で勝利を収めたが、イメージがかみ合わないまま近大戦に臨んだ。ここでも薄氷の勝利。さらに、中大戦は開始40秒で波多野が捻挫するアクシデントにも見舞われる。しかし、負けなかった。波多野の穴を大宮宏正（1年）が踏ん張って埋めた。

苦しい序盤戦を勝利に導いたのは菊地勇樹（4年）のインターセプトだ。守備の中心は1年間のリハビリから復帰した中澤光昭（4年）。そしてチームの中心は中川兄弟が仙人と呼ぶ青木。「東海大戦も近大戦も負け試合だったけど、負けなかった。4年生の力というのは大きい」と、新関監督はたくましく成長した選手たちを褒め称えた。

最悪だったという予選ブロックの流れは、決勝リーグの青学大戦まで引きずったが、日体大戦から本来の調子を取り戻した。すべての持ち味が出たのが早大戦。MVPを獲得した青木のシュートが次々決まる。中川和のドリブルが会場を沸かせる。長澤晃一（2年）はド迫力のダンクシュートを試みた。決勝リーグとは思えない驚異のダブルスコアで圧倒した。

選手の心には会心のプレーを演じたことに対する満足感があったのだろう。優勝の行方を占う第2試合は、ことさら日体大を応援することもなく、青学大側に多くの選手が座った。日体大が83―80で勝利。悲願Vの瞬間だった。

「つまらないバスケットはしたくない。見ている人が面白いバスケットをしたい」

新関監督のポリシーは、小さくまとまってバスケット本来の持つ楽しさを失っている日本バスケット界への挑戦でもあった。

ガタイの強い大型選手にはダンクシュートを奨励し、失敗してもチャレンジを褒める。他チームなら間違いなくセンターに収まるような長身選手でも、走力があれば3番のポジションを与え、ポイントガードにもコンバートする。

菊地が中澤が4年生パワー全開

各クオーターの残り20秒には4人を引かせて中川和が1対1のショータイム。試合前のアップでさえスタンドの目をクギ付けにするショーバスケットは、勝利という答えをはじき出した今、有無を言わせぬ説得力を備えた。

春からは連覇へ向けた新たな戦いが待っている。新関監督が「主力3、4人を欠いても大丈夫。2チーム、いや、3チームくらい作れそう」という層の厚さを誇る専大。未来は明るい。4年生になる佐藤浩貴、小野学、平山稔、上出浩之が新人王の伊藤孝志（1年）ら若い選手を引っ張ることで、連覇、そして専大時代の到来が期待される。専大が変える日本を変える。

（スポーツニッポン新聞 育内由美子）

▽決勝リーグ

専大 110	専大 80	青学大 73	
28	16	27	39	21	17	18	24	17	28	13	15
14	12	10	18	26	15	18	15	20	18	18	14
54 早大				74 日体大				70 専大			

▽最終順位①専大2勝1敗②日体大2勝1敗③早大1勝2敗④青学大1勝2敗（1、2位と3、4位は直接対決の成績による）

協力 毎日新聞 スポーツニッポン新聞
'03. 2
課外体育課